ひとりひとりの「生きる」を支える④

被災直後の混乱の中で奮闘した教職員たち

▲2011（平成23）年3月11日の職員室の板書。翌3月12日は卒業式が行われる予定で講堂には紅白幕が飾られていた。

写真提供　三浦秀一

町の人口の約3分の2の人たちが帰る家を失い、高台の避難所は着の身着のまま避難した人たちであふれていた。

被災を免れた高台の学校では、教職員たちが、電気も水も通信も途絶えた中、児童・生徒の所在確認や安全確保、避難者たちの対応に追われていた。

トイレも使用できなくなったため、プールの水をバケツで運び、夜は理科室にあったロウソクの明かりを頼りに、生徒たちと共に教室で一晩を過ごしたという学校もあった。

翌日からも教職員たちは奮闘した。屋外にトイレを作ったり、夜間は校舎を見回って、住民たちの避難所生活を支え続けた。教職員の中には、自宅が被災した人もいた。家族が無事なのかもわからない状況の中、彼らは学校に泊まり続けながら学校再開の準備を続けた。子どもたちに一日も早く当たり前の日常と学びの場を取り戻したい一心だった。

当時の生徒たちは、寄り添ってくれた教職員たちの姿を、大人になった今でも鮮明に覚えている。